

JLTA Newsletter No. 43

日本語テスト学会

The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 43 発行代表者: 渡部良典 2017年(平成29年)9月30日発行
発行所: 日本語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1 順天堂大学さくらキャンパス
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001(代表) FAX: 0476-98-1011(代表)
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp URL: <http://jlta.ac>



2017 IACAT Conference で垣間見た CAT の (過去と) 未来

小山 由紀江

8月18日から21日まで新潟で開催された2017 International Association for Computerized Adaptive Testing (IACAT) Conference (実行委員長は木村哲夫氏)に参加した。世界中から150名ほどのCATの研究者が集まり、4日間色々な視点からの研究発表を聴くことができた。私が出会った人たちだけでも、アメリカ(もちろん最多だったが)、イスラエル、オランダ、スロバキア、ロシア、ドイツ、インドネシア、スペイン、オーストラリア、シンガポール、中国、韓国、台湾、フランス等、参加者は多岐にわたり興味の惹かれる発表タイトルも数多く見られ、参加したセッションでは活発に意見が交わされていた。会場は新潟の朱鷺メッセ、ゆったり流れる信濃川沿いの整った近代的な施設で、レセプション、学会ディナーを含め、大会運営はきめ細やかな心遣いの感じられる見事なもの、楽しく刺激的な4日間であった。

IACATは2007年、2009年に開かれたGMAC® Computerized Adaptive Testing Conferenceから発展して2010年に設立された国際学会であるが、今年第7回目を迎えた。(GMAC®はGraduate Management Admission Councilのことで、アメリカのMBA入学資格試験のGMATをCATで実施している。)大規模の包括的な内容の学会と異なり、CATというある程度限定的な領域に興味を持った研究者の集まりという点で、私にはLanguage Testing Research Colloquium (LTRC)に共通する参加者同士の親密な雰囲気があるように思えた。

発表は3カ所のパラレルセッションで行われ、キーノートを含めて発表件数は全体で約50件、シンポジウムが5件、一日目の午前中には4つのワークショップ(Introduction to Developing a CAT, CAT Simulations: How and Why?, The Shadow-test Approach, Multivariate CAT)が開催された。

IACATはCAT全般を対象とした学会であるため、内容はintelligent testや国家的な大規模high stakes testing、またitem banking等の手法に関するもの、calibration method等のpsychometricなものまで多種多様で、言語教育に関連したCATの発表はむしろ少数派、全体で3件のみに留まった。また参加者に大学関係だけでなく評価やテスト作成に関わる企業(非営利を含め)の人が多いのもこの学会の特徴であろうか。

今回目立ったのはmultistage testing(1問ずつの解答の正否によって次の問題を選択するのではなく、ある程度の数の問題をひとまとまりにして、最初のステージの解答結果によって次のステージに適切な難易度の

まとまりを選ぶ方式) を扱ったものでシンポジウムも含め 10 件の発表があり, CAT の方式として multistage は今後も中心的課題となっていくだろう。また CAT のもう一つの新しい方向性として cognitive diagnosis を扱ったものが 7 件, そして Computerized formative assessment を扱ったものが 2 件あったことが挙げられる。Cognitive diagnosis CAT (CD-CAT) は, 受検者がどの cognitive skill (attribute と言われる) を習得しているかいないかを見定めて診断情報を出すものであるが, 今回の IACAT ではこの attributes を分析する様々な枠組みについて Bayesian Network Modeling, Hierarchical Diagnostic Classification Model, の提案がされていた。CAT は大規模なテストを対象とする場合が多いのだが, CD-CAT は小規模な授業などでもその意味を発揮する。そこで小規模な CD-CAT を可能にする nonparametric approach を提案した発表もあった。最終的に推定された能力として結果の数値と一般的な解釈だけが与えられる従来の CAT にありがちなフィードバックから一歩進んで, 個々の学習者のどこがどう理解できていないのかを示してくれる CD-CAT には個人的にも今後に大きな期待を寄せている。また CD-CAT と重なる部分があるが, 学習者に適切なフィードバックを与えることによって学習を促し能力の伸長を目指す Dynamic Assessment との融合の可否や方法論も含め, CAT のこれからの動向に注目している。

これに併せて, 昨年相次いでご逝去されたお二人の Psychometrician について少し述べたい。鮫島史子氏と龍岡菊美氏である。周知のごとく鮫島氏は順序のある 3 値以上のデータを分析する Graded Response Model を 1969 年に発表した Samejima として広く知られた研究者であり最後はテネシー大学の教授になられた。龍岡氏はイリノイ大学で PLATO という数学の学習システムを開発した後, ETS に所属し最後は Columbia 大学で教鞭をとられた。龍岡氏はテストから診断的な

情報を取り出すことを目的として Rule Space Method を提案, 1990 年代に次々と論文を発表し, 1997 年には Tatsuoka & Tatsuoka のご夫妻で Computerized cognitive diagnostic adaptive testing: Effect on remedial instruction as empirical validation という論文を発表され, その意味でも診断情報を与える CAT を提案した先駆的な存在であった。今回の IACAT の発表者の中にも Samejima, Tatsuoka の研究を参照している人が複数見られたように, このお二人の研究は現在まで大きな遺産として受け継がれて来ている。

私は奇しくも龍岡氏がイリノイ大学にいた頃同じキャンパスで学んでいたが, 当時何も分からぬ修士の院生で龍岡氏の事は全く知らなかった。偶然, 私の近年の研究トピックの一つが CAT で, とりわけこのところ Dynamic assessment を CAT で実現する手法を調べていた。その際に Tatsuoka の Rule Space Method に行き当たり, そして龍岡氏がイリノイ大学にいたことを知った。そのような経緯もあって, 龍岡先生の授業を少しでも受けたかったと今頃になってとても残念に思っている。

IRT や学習者診断の統計手法に関連して, 鮫島氏, 龍岡氏という偉大な研究者達が残してくれたものは測り知れない。お二人に心から感謝し, 哀悼の意を表したい。また同時に, IACAT に多くの若い研究者が, そして多くの女性研究者が参集し活発に発表していたことに, 大いに意を強くし, 私自身が励まされたことも付け加えておきたい。



日本言語テスト学会
第7回最優秀論文賞
受賞者から

Message from the Recipient of
The 7th JLTA Best Paper Award

小野塚 若菜（ベネッセ教育総合研究所）

このたび、日本言語テスト学会第7回最優秀論文賞をいただき、大変光栄に存じます。調査に協力してくださった方、そして研究のご指導いただいたすべての先生方に、心より感謝申し上げます。

受賞論文の「ビジネス日本語テストにおける DIF の分析—性別および居住地を下位集団として—」は、外国人日本語学習者を主な対象としたビジネス日本語テストにおいて、DIF（特異項目機能）の分析をしたものです。

DIF とは、あるテスト項目について、受験者の能力が同水準であるにもかかわらず、性別（男・女）や居住地（日本国内居住者・国外居住者）によって正答する確率に違いがあることを言います。DIF が一方の集団に不利に働く場合は、受験者にとって望ましくないバイアスであると考えられ、削除したり修正したりすることが必要です。

本論文では DIF の分析をするにあたり、受験者の解答データに基づく統計的手法によるものと、テスト項目作成者の主観に基づく手法によるものとを並行して行い、両者が一致するかどうかという検証も行いました。その結果、項目作成者の主観によって見出される DIF は統計的に検出される DIF とはあまり一致しないことがわかりました。

テスト開発の現場では、テスト項目作成者が主観的にバイアスを判断している場合が多いのですが、本研究の結果は、その判断が必ずしも的確であるとは言えず、実際にはバイアスのある項目を出題したり、逆に不必要に削除したりしている可能性もあることを示唆しています。

話は変わりますが、わたしはこれまでいくつかの日本語テストの作成・開発に携わってきました。各テスト開発現場では、テスト項目作成者が、自身のビリーフに基づいてテスト項目の原案の採否や最終的な出題の可否を判断しています。しかしその判断基準ははたして正しいのだろうかという疑問を持っていました。もし項目作成者の判断が正しく、的を射た指摘をしているならば、それは項目作成者間で継続的に共有すべきですし、逆に正しくないならば、議論し改めていく必要があると考えました。項目作成者が持つビリーフ、すなわち経験知を、形式知にすることができたら、テストの質は保たれ、より高品質に発展させていくことができ、テスト開発分野にとって貴重な財産になるでしょう。そのように考えたことが、わたしが DIF の研究を始めたきっかけとなりました。本論文で疑問に対する答えに少しでも近づくことができたと考えています。

本論文は、博士課程在学中に執筆しました。採択の結果をいただいたときは、これできっと博士論文も完成させられる！と確信することができました。そして論文賞が大きな励みになったことは言うまでもありません。今後も初心を忘れず、テスト開発者と受験者の双方に役に立つ研究を、真摯に進めてまいります。



**Report on the 45th JLTA
Research Seminar July 8 (Sat)**

**於：福島大学（福島市）
「技能統合型ライティングの実践と評価」**

報告者 高木 修一（福島大学）

2017年7月8日（土）福島大学にて第45回日本言語テスト学会研究例会が開催された。テーマは「技能統合型ライティングの実践と評価」であり、大学入試改革や次期中学校学習指導要領を受け、非常にタイムリーなテーマとなった。

研究例会は杉田由仁氏（明治学院大学）による基調講演から始まった。基調講演のテーマは「技能統合型授業におけるライティングの指導と評価—次期学習指導要領に向けて—」であった。最初に、次期学習指導要領が育成を目指す資質・能力の3つの柱である、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」そして「働く知識・技能」について概観された。その後、英語（外国語）における「思考力・判断力・表現力」の解釈として、「知識や得た情報を活用して、自分の意見や考えを外国語で形成・整理・再構築する力」と説明されていた。その上で、Harmer（2007）に基づく技能統合型授業において育むべき思考力・判断力・表現力と、その方法論についてご紹介があった。

次期学習指導要領における技能統合型授業の位置づけが示された後は、具体的なライティング活動の事例や指導方法についてご説明があった。具体的には、50分の授業における指導手順や、ライティングによる情報発信や自己表現を見据えた指導の工夫についてご紹介があった。最後に、技能統合型ライティングを見据えられた上で、ライティングのテストと評価について、ルーブリック等の評価

基準を中心にご説明を頂いた。

基調講演後の質疑応答では、ルーブリックの作成方法や活用方法、そして評価者間での評価観点のずれへの対応など、日頃の教育における悩みを含めた活発な議論が行われた。

基調講演に続いて、3件の研究発表が行われた。まず、安田尚子氏（会津大学）から「マンガの言語を用いたライティング指導」のタイトルでご発表を頂いた。協力者の理工系の大学生は英語について興味・関心が低く、また日本語と英語を一对一对応で捉えているという問題があり、これらの問題を解決するためにマンガを用いた教育介入の効果を検討された研究であった。主な結果として、マンガを用いた教育介入により、ライティングにおける語数の増加が見られた。

2件目の発表は、松浦浩子氏（福島大学）と宮本節子氏（兵庫県立大学）から「TEDとForumを利用した技能統合型の英語教育：投稿語数から見えること」のタイトルでご発表を頂いた。Forumに意見を投稿できる学習プラットフォームであるTEDDiscussionとWEnglishについてご紹介があり、これらにおける投稿パフォーマンス（語数）に影響する要因が検討された。主な結果として、英語熟達度が高いからといって投稿語数が多いわけではなく、アンケートにおける様々な学習者の要因が投稿語数に影響していることが示された。

3件目の発表は、久保田恵祐氏（福島大学大学院）から「日本人学習者向けRTWタスク評価基準の検討」のタイトルでご発表頂いた。まず、リーディングとライティングを統合したRTWタスクの評価に関する先行研究をレビューし、問題点を整理された。その上で、日本人学習者を対象とした評価基準策定のための、今後の研究の方向性と研究デザイン案についてご発表されていた。質疑応答にて、先行研究や今後の研究デザインについて充実した意見交換が行われた

最後に、例会当日は7月上旬にも関わらず最高気温36度と猛暑日であった。ご多用な時期であ

るにも関わらず、講演講師を快諾下さった杉田由仁氏、研究発表者、参加者、そして関係者のみなさまに心より御礼申し上げます。

**海外の学会・研究会
参加報告
World Conference Reports**

The 4th International Conference of the Asian Association for Language Assessment

**報告者 太原達朗（早稲田大学大学院
教育学研究科）**

大会名：The 4th International Conference of the Asian Association for Language Assessment

開催日：2017年6月21-23日

テーマ：Connecting Assessment with Teaching and Learning: Innovation and Impact

開催地：National Taiwan University, Taipei, Taiwan

Asian Association for Language Assessment (AALA) は比較的最近設立された学会であり、国際会議は年に1回行われ2017年で4回目となる。Asian Association for Language Assessment (AALA) という学会を知ったのは私の指導教授である澤木泰代先生がAALAでSecretary/Treasurerを務めているからであり、今回自分もポスター発表を行おうと参加を決意した。

初日は2つのワークショップに参加した。1つ目は澤木先生の Generalizability theory (G

theory) に関するもので、G theory の理論の説明の後、G theory 専用フリーソフト mGenova の使い方の初歩を学ぶという構成で非常に実践的だった。2つ目は Alister Cumming 先生の Verbal reports on writing assessment に関するもので、実際に think-aloud を行いながら writing task を行う活動が印象的で、verbal protocol の面白さと難しさを実感した。

2日目と3日目では講演と口頭/ポスター発表の日であった。大会テーマは "Connecting Assessment with Teaching and Learning: Innovation and Impact" であり、講演ではこの2日間でこのテーマに関する Keynote speech と4つの Plenary speech を拝聴した。各発表者が Criterion-related test や Local Culture, Learning Oriented Assessment, Gamification, Self-assessment など様々なテーマや各国の assessment の状況を紹介しつつ、teaching/learning と assessment を繋げるためにどのような工夫が必要か説明していた。日本でも assessment を teaching/learning に活用するにはどうすべきかという点は今後の課題であろう。

口頭/ポスター発表では様々なアジア圏で使われているテストに関する研究を中心に研究発表を聞いた。台湾の GEPT、中国の TEM8 など各国ローカルの High-stakes test の validation や washback の研究は着眼点や手法など日本のテスト研究にも参考になるのでは、と発表を聞きながら何回も思った。また Automated scoring や Cognitive diagnosis Assessment などの最新の研究がアジアの研究者によって行われているのを見て、論文上で見たことしかなかった研究テーマを非常に身近に感じる事ができた。これらがアジア圏に特化した学会に参加するメリットであろう。

口頭/ポスター発表の雰囲気は落ち着いたものであり、一方で発表者への質問も専門的な知識を元にした鋭いものだった。私が日本の大学入試で測定する英語力の needs analysis に関する予

備的な調査をポスター発表した際にも各国の人が日本の状況について興味を持って質問してくれたり、研究を発展させるための今後の方針について丁寧にアドバイスをくれたのは良い経験だった。

また、学会2日目には Student Committee のメンバーがコーディネートした Graduate Student Network Lunch にも参加した。AALA の特徴の一つとして Student Committee が存在し、各国の大学院生が中心となって活動している。Network Lunch ではお昼を食べながら各国の大学院生が自己紹介や研究テーマを紹介しあった。台湾や中国、マカオ、シンガポールなど様々なバックグラウンドを持つ学生たちと交流を持つことが出来たのは刺激的であった。

他に印象に残っているのは、多くの学会参加者が宿泊した学会推奨のホテルは開催地の National Taiwan University が所有しているもので学会会場まで徒歩 30 秒で非常に便利だったこと、また3日間の毎回休憩時間には毎回各スポンサーから軽食が提供され、多くの参加者が毎時間ごとにケーキなどお菓子をたくさん食べていたことである。

総合的に AALA は非常にいい雰囲気です、なおかつとてもためになった。来年はより発展させた自分の研究成果を伝えに行きたい、と思わせてくれる国際学会だった。次回大会は 2018 年 10 月頃に上海で行われる予定である。

1st International Conference on New Trends in English Language Teaching and Testing

報告者 佐藤臨太郎 (奈良教育大学)

大会名 : 1st International Conference on New Trends in English Language Teaching and Testing (NTELT)

開催日 : 2017 年 8 月 24 日

開催地 : Flora Grand Hotel, Dubai, UAE

アラブ首長国連邦、ドバイと聞いて何を連想するだろう。灼熱の太陽、アラビアンナイト、砂漠、ラクダ…実際にしてみるとさらに、828m の世界一の高層ビル「ブルジュ・ハリファ」をはじめとする超高層ビル群、街中を滑走する超高級車、イスラムの衣装を身にまとった人々…。共同研究者とともに初めて訪れた中東の大都市は私にとっての異文化経験でもあった。イスラムの教えにより飲酒が固く禁じられており、街でビールを飲めないこと、懇親会でも一切アルコールが出ないことが一番堪えたと言っていた共同研究者もいた（私ではありません）。今回は第1回目の開催となる NTELT への参加を決めた理由の一つは未知の地「中東」を訪れ、自身の見聞を広め、普段あまり交流することのない国々からの研究者の方々との親睦を深めたいということであったが、実際に学会では、ヨーロッパ各国の研究者やイギリスをベースにしているインドネシア人研究者の方々と有意義な意見交換をすることができ、目的の一つを達成することができた。さらに私にとっての大きな喜びは、基調講演者である Roy Lyster 先生と個人的に初めてお話をする機会を得たことである。講演では、現在日本でも注目を集めている Content-Based Instruction (CBI) や Content and Language Integrated Learning (CLIL) の EFL 環境での導入における（効果、良さがあるということを前提として）懐疑的な面、警告を述べられていたが、日常的に英語を使用する必要のない、絶対的インプットの少ない日本の状況、さらに教師の英語力が必ずしも高くないという小中高での CLIL 導入について大きな示唆のあるものであった。Jack C. Richards 先生は “Teacher Identity Language Teaching” というタイトルの講演において、教師の Identity について述べられた。Identity と実際に実践している授業内容・方法との関連、また日本人教師が英語で教える上でのその Identity の変容等、個人的に今後の大きな

宿題をいただいたと感じている。もう一つの基調講演は Hossein Farhady 先生による“Learning Oriented Assessment”であるが、これはコミュニケーション重視に大きく舵取りをし、パフォーマンステストの重要性がますます高まっている日本の英語教育に、非常に示唆に富むものであった。

さて、東海大学の古賀先生、静岡理工科大学の今野先生による我々の“Variations in L2 Self and WTC”と題する研究発表であるが、10分という時間制限にも関わらず、ポイントを押さえ、ユーモアを交えながら2人の尽力により成功裏に終わった。会場からも積極的なコメントもいただき、今後の研究に生かしていきたいと考えている。なお、古賀先生による Lyster 先生を大爆笑させたジョークはこの学会のハイライトであったような気もしている。今回が第一回目の開催ということで、運営上の大きな課題も見受けられた。例えば、10分という制限時間を守らない発表者が多々見られ、延々と30分以上話している方もいたが、何のお咎めもなかった。当日になってようやく、研究発表のプログラムが発表になった。2ホールを使用していたが、1階と7階と離れており、途中での会場移動が円滑にいきにくかった等である。第2回目においては改善されることを期待したい。

このような有意義な機会を得られたことを共同研究者の古賀先生、今野先生に感謝し、同行した宮城教育大学のエドリアン・リース先生にもお礼を申し上げて、私からの報告を終わりとしたい。

書評

Book Reviews

『テストが導く英語教育改革：「無責任なテスト」への処方箋』

根岸雅史 2017年 三省堂

私の友人で気鋭のテストング研究者でもあるK氏は、学部生のときに『無責任なテストが「おちこぼれ」を作る』（若林俊輔・根岸雅史、1988年、大修館書店）に出会い、テストを専門にすることを決意したという。私自身も院生時代にこの本を手にし、タイトル・内容・文体、のすべてから刺激を受け、テストについて真剣に考えるようになった。本書は『無責任なテストが「おちこぼれ」を作る』の著者の一人、根岸雅史氏によるものである。『無責任なテストが「おちこぼれ」を作る』が当時の（残念ながら現在も）テストの問題点を徹底的に指摘し、テスト作成者の意識を変革させることが目的だったとすると、本書はそれを一歩進めて、「責任あるテスト」の具体的な作成法（解決策）を提示することがねらいとなっている。

本書は3部構成である。第1部はテスト作成の基礎知識に関して6章にわたり解説されている。1章ではテストをする理由、2章ではテストの「設計図」の重要性、3章では妥当性、信頼性、波及効果、実用性というテストの4大要素について解説している。4章では多肢選択式テストの作成法、5章ではコミュニケーション・テストングが紹介されている。そして6章は新旧の高校検定教科書の比較を通して、授業中およびテストにおけるタスクを検討している。

第2部「テスト作成のつぼ」は実践編である。リーディング（7章）、リスニング（8章）、ライティング（9章）、スピーキング（10章）、文法（11章）、単語（12章）のそれぞれの技能や知識のテスト作成についてヒントが得られる。加えて、テストの実施時期（13章）と既成テストの利用法（14章）も、自身のこれまでのテスト作成・実施を見直すのに役に立つ。

第3部「テストとつなぐ CAN-DO リスト」ではCAN-DO リストの具体的かつ有効的な活用法が解説されている。CAN-DO リストの作成（15章）から始まり、リストの使用（16章）、改善（17章）、観点別評価導入の経緯と問題の整理（18章）、技能統合評価における診断（19章）

と、5章にわたりCAN-DO リストに関して網羅的に記述されている。

テストに関する図書でCAN-DO に関してこれほど大幅に紙面を割いている本はなく、この点が本書の大きな特徴にもなっている。結びではいわゆる「総合問題」にふれている。『無責任なテストが「おちこぼれ」を作る』から一貫して総合問題の問題点を指摘し、またその根絶を訴えてきた筆者だが、依然として総合問題が使用されていることを嘆いている。総合問題から抜けられないテスト作成者であっても、本書を丹念に読み、「なぜテストをするのか」という問いに真摯に向き合うことで、総合問題の呪縛から解放されることであろう。

評者 飯村英樹（熊本県立大学）

『実例でわかる英語テスト作成ガイド』

小泉利恵・印南洋・深澤真編 2017年 大修館書店

本書のユニークかつ特筆すべき点は、テスト理論の解説だけに終始せず、数多くのテスト実例を用いて具体的改善例を提示したこと、及び各種テストの作成を最初から最後まで詳しく解説しているところである。ぜひ現場の英語教師に手に取ってもらい、テスト改善に役立ててほしい良書である。

本書は大きく3章で構成されている。第1章「テストをどう改善するか学ぼう」は、類書の中ではほぼ初めてのテスト添削事例集であり、これを見るだけでも本書を買う価値がある。まず「添削前」として実際に中高で使用されたり、教職課程の学生が作成したりしたテスト項目の実物が収録され、どこが問題なのかを指摘している。その隣に「添削後」として改善したテストの例が収録され、改善点についての解説が付いている。すばらしいのは、そうした改善の理論的根拠となる2章のどこを参照すればいいのか、それぞれに詳細なクロスリファレンスが付いているところである。読者はなぜそのような修正が行われているか

理由がわかるとともに、テスト理論の基礎が学べるようになっている。

第2章「テスト作成に必要な理論を学ぼう」では、基礎理論が過不足なく丁寧に説明されている。4技能テストだけでなく、今後コミュニケーション能力測定方法としてますます注目されるであろう技能統合型テストに紙幅を割いている点も評価できる。テスト項目だけでなくルーブリックの具体例なども提示されているのがありがたい。さらにフィードバックの方法やテスト分析についても解説があることは、現場の教師に大きな教育的示唆をもたらすであろう。

第3章「テストを一から作ろう」も、類書に例を見ない、教育的価値の高い章である。各技能ともテスト細目から採点基準まで詳細に解説してくれていることが大変参考になる。採点例までついているところがクワイ。技能統合型のライティング・スピーキングテストの作成方法も示してくれている。

一読者として多少の難点を述べさせてもらうなら、1章と2章を「行ったり来たりしながら読み進める」のは予想以上に骨が折れたということである。この2章を統合し、改善の実例の下にすぐ解説があったほうが、個人的には読みやすいのではという印象を持った（もちろん改善点は理論編の複数箇所に関わるので、そうした構成は難しいかもしれない）。また第2章の2.2と2.3には重なる記述（技能統合型テストなど）があり、もう少しすっきりした構成にできなかつたらどうかという感想も持った。

しかし、本書が現場ですぐに役立つ好著であることは間違いない。このように「実例でわかる」テストの本は類例を見ない。一人でも多くの中高の英語教師に読んでもらい、テスト改善に役立ててほしいと願ってやまない。

評者 笠原 究（北海道教育大学）

浪田克之介先生の平成29年春叙勲
のご受章について

本学会元会長で理事の 北海道大学名誉教授 浪田 克之介先生がこのたび、平成 29 年春の叙勲において瑞宝中綬章（教育研究功労）を受章されました。浪田先生、心からお慶び申しあげます。

JLTA 事務局より連絡
Messages from JLTA Secretariat

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

- (1) 9月9日・10日にJLTA第21回全国研究大会が会津大学で開催されました。全国研究大会実行委員長の金子恵美子先生をはじめ、藤田智子先生、印南洋先生、木村哲夫先生、澤木泰代先生、谷誠司先生、高木修一先生には実行委員としてご尽力いただきました。改めて感謝の意を表したいと思います。

次年度の大会は、2018年9月8日（土）・9日（日）に北海学園大学で開催されます。最新の情報はJLTAのホームページ（<http://jlta.ac/>）をご覧ください。

- (2) 7月8日に福島大学にて第45回日本語テスト学会研究例会が開かれ、活発な議論がなされました。

10月28日（土）には、第46回日本語テスト学会研究例会/第4回中部地区英語教育学会（CELES）近畿地区研究会が、中部地区英語教育学会近畿地区と合同で、桃山学院大学で開催されます。どうぞ参加ください。

日時：2017年10月28日（土）

13時00分～17時40分

場所：桃山学院大学2号館

302（CALL-2）教室

テーマ：「ダイナミック・アセスメント：指導と評価の一体化」

参加費：無料

問い合わせ先：桃山学院大学 島田勝正

email: kshimada@andrew.ac.jp

詳細は以下へ：http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21

- (3) 『日本語テスト学会誌』第20号が近々発行され、お手元に届く予定です。学会誌の論文等は、J-STAGE（<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>）にて同時期に一般公開されます。

『日本語テスト学会誌』は、狭義のテストングに関するものだけでなく、広く評価に関する論文を募集しています。それには教育実践やプログラム評価に関するものなど、評価全般に関わる実験・知見を含みますので、どうかふるってご応募ください。次の投稿締め切りは2018年4月30日（月）です。

尚、執筆要項に修正があり、執筆用テンプレートも作成いたしました。提出先も以下に変更になりましたので、ご注意ください。

原稿提出先：学会誌編集委員長 松本佳

穂子 mkahoko@tsc.u-tokai.ac.jp

最新情報は以下へ：http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62

また、以下の連絡が編集委員会よりありますので、執筆者はご注意願います。

最近、英文原稿の校正が十分でない論文の投稿や査読後の修正版の提出などがありま

す。以下の執筆要項の項目に沿っていた
だくようお願いいたします。

母語でない言語で論文・要旨を執筆した場
合、必ず母語話者のチェックを受けた原稿を
提出すること。文法、スペリング、句読点法
などに言語上のミスがある場合は、全て著者
責任となるため、投稿前及び著者校正時に
は必ず周到なチェックをお願いしたい。

- (4) 8月7日に、本学会が発行するジャーナルの
論文すべてを CiNii から J-STAGE (Japan
Science and Technology Information
Aggregator, Electronic) へ移行いたしました
（『外国語教育評価学会研究紀要』第
1～3号、『日本言語テスト学会研究紀要』
第4～13号、『日本言語テスト学会誌』第
14～19号）。

J-STAGE における『日本言語テスト学会
誌』のアクセスに関して、全文 PDF のアクセス
の場合、日本からの 620 件に加えて、アメリ
カから 1,037 件、中国から 891 件等海外か
らのアクセスも多くなっております。今後さらに学
会誌の閲覧が増えるように努力してまいりま
す。

- (5) 9月10日の総会にて、以下が承認されま
した。
1. 2016 年度活動報告（案）
 2. 2017 年度活動計画（案）
 3. 2016 年度決算報告（案）
 4. 2017 年度予算（案）
 5. 学会会則改訂（案）
 6. 2016 – 2017 年度役員・委員名簿
（改正案）
 7. 2018 – 2019 年度役員・委員改選
（改正案）
 8. その他、委員会報告等

学会会則については、2018年4月1日に
改訂・施行されます。詳細については、事務
局より届く総会資料をご参照ください。

- (6) JLTA 研修講師派遣事業が始まりました。本
事業は、テスト利用・作成に関わる研修を行
う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うもの
です。まず講師リストへの登録を希望されるか
についての Web アンケートを作成し、5月から
7月にかけて、名誉会員と一般会員に向けて
講師登録希望伺いを行い、本年度分のリス
トを完成いたしました。

7月31日付で都道府県・政令指定都市の
教育委員会 67 団体、私学協会 47 団体に
案内・講師リストを送付しました。今後は、9
月10日の総会で承認されました、JLTA 研
修講師派遣委員会を中心に進めていく予定
です。お知り合いの方などにご紹介いただけれ
ば幸いです。

ウェブサイト：[http://jlta2016.sakura.
ne.jp/?p=929](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929)

- (7) 2016年9月17日に開かれた役員会での議
論に基づき、日本言語テスト学会提言作成
委員会が発足しました。委員会での議論と理
事・運営委員の大勢からの承認の後、2017
年1月4日に、文部科学省宛てに「大学入
学希望者学力評価テスト（仮称）における
英語テストの扱いに対する提言」を提出しま
した。提言の本文とその解説は、大修館書店
『英語教育』2017年5月号に掲載されました。
本学会ウェブサイト（[http://jlta2016.
sakura.ne.jp/?page_id=865](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=865)）でも日本語
・英語版が参照可能です。

- (8) その他
- 会員情報や会費納入状況の確認・修正が
できる「マイページ（[- 10 -](https://www.bunken.</div><div data-bbox=)

org/jlta/mypage/Login)]はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>) 。マイページ内の会員向けページにおいて、ジャーナル・ニュースレター等の掲載があります。

●所属や書類発送先など登録情報にご変更がある場合、マイページでの登録情報の変更を3月末までをお願いいたします。学生会員の方には、毎年学生証のコピーをご提出いただいています。

●2016・2017年度の会費振込について、これからの方は早急によりしくお願いいたします。2016年度分のお支払いがない場合には、2018年4月より送付物の発送がなくなり、マイページの使用もできなくなります。

●残念ながら、本会の退会を希望される方は、事務局 (jlta-post@bunken.co.jp) へご連絡をお願いいたします。

文責：

JLTA 事務局長 小泉利恵 (順天堂大学)

JLTA 事務局次長 片桐一彦 (専修大学)

横内裕一郎 (弘前大学)

深澤真 (琉球大学)

日本語テスト学会 (JLTA) 公式

Twitter アカウント: @JLTA_official

https://twitter.com/JLTA_official

Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have.

(1) The 21st Annual Conference of the Japan Language Testing Association was held at the University of Aizu on September 9 and 10. We would like to express our sincere appreciation to the members of the Annual Conference Executive Committee: Emiko KANEKO (Conference Chair), Tomoko FUJITA, Yo IN'NAMI, Tetsuo KIMURA, Yasuyo SAWAKI, Seiji TANI, and Shuichi TAKAKI for their support.

Next year's conference will be held at Hokkai-Gakuen University on September 8 (Saturday) and 9 (Sunday). The latest information can be found at <http://jlta.ac/>

(2) The 45th JLTA Research Meeting was held at Fukushima University on July 8, at which there was a lively discussion.

The 46th JLTA Research Meeting/The 4th Kinki Area Research Meeting of the Chubu English Language Education Society (CELES) will be held at St. Andrew's University (Momoyama Gakuin University) on October 28 (Saturday), jointly hosted by the Kinki Area Research Group of the Chubu English Language Education Society (CELES).

Please see http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21 for details.

(3) The *JLTA Journal* Vol. 20 is being printed and will be sent out soon. This

volume will be uploaded onto J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) soon after the publication.

The *JLTA Journal* is inviting various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and assessment. The next submission deadline is April 30, 2018 (Monday).

We have revised the Journal Guidelines and created journal templates. The submission email address has been changed as follows: Kahoko MATSUMOTO, Chair of the Journal Editorial Committee: mkahoko@tsc.u-tokai.ac.jp

Please see http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62 for details.

Here is a message from the Journal Editorial Committee: "We recently received submissions or resubmissions of articles and abstracts whose English editing was not sufficiently conducted. Please follow the directions below from the Journal Guidelines."

From the Journal Guidelines: "Prior to submission, articles and abstracts written in a language of which the author is not a native speaker should be proofread by a native speaker of the language of the submission. The

author is responsible for all the errors in grammar, spelling, mechanics, and other language-related areas. Please check them carefully prior to submission and during author revision."

(4) On August 7, all of the articles in the *JLTA Journal* Vol. 1 to 19 were transferred from CiNii to J-STAGE.

Our *JLTA Journal* articles on J-STAGE have been extensively accessed from abroad. For full-text PDF access, there were 1,037 retrievals from the U.S., 891 from China, and 620 from Japan. We will strive to obtain more page views of our journal on J-STAGE.

(5) The following were approved at the General Business Meeting on September 10:

1. 2016 academic year activity report (draft)
2. 2017 academic year activity plan (draft)
3. 2016 academic year settlement report (draft)
4. 2017 academic year budget (draft)
5. Revision of the constitution (draft)
6. List of officials and committee members in the 2016 and 2017 academic years (draft)
7. List of officials and committee members in the 2018 and 2019 academic years (draft)

8. Reports from the committees and others

Website: <http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

The revised version takes effect on April 1, 2018. Please see the General Business Meeting document that the Secretariat will send out.

(6) We have started the JLTA Training Lecturer Dispatch project, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations that would like to hold a training session or meeting on test development and use. To create a list with lecturer names, we generated a Web-based questionnaire to ask JLTA honorary and ordinary members whether they are interested in registering themselves as a possible lecturer for this project. From May to July, we distributed the questionnaire and received positive responses from our ordinary members. We then finalized this year's list of lecturers.

On July 31, we sent a document explaining our project along with the list of lecturers to 67 boards of education in prefectures and ordinance-designated cities and 47 private-school associations. The JLTA Training Lecturer Dispatch Committee, which was approved at the General Business Meeting on September 10, will take care of this project. Please feel free to convey this information to those who may be interested.

(7) Based on the JLTA official meeting on September 17, 2016, the Committee of the Position Statement on the New University Entrance Examination Policy was founded. After a long discussion, the Committee drafted a proposal regarding the current university entrance examination reform. The draft was approved with some modification by a majority of JLTA officials.

The committee submitted the proposal ("A proposal for how to use English tests as part of a new entrance exam [a test evaluating scholastic ability for university entrance applicants; tentative name]") to the Ministry of Education on January 4, 2017.

The committee wrote an article on the proposal and its annotations. It appeared in *Eigo Kyouiku* (The English Teachers' Magazine) from Taishukan in the May 2017 issue.

The proposal and the annotations can be read both in Japanese and English on our website: http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=865

(8) Other information

●Have you visited the "My Page" site (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>), where you can check and modify your membership information

and check your yearly membership fee payment status? Please contact us (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>) if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access recent *JLTA Journals*, previous newsletters, and other materials specifically for members on the "My Page" site.

●If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on "My Page" by the end of March. We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.

●If you have not yet paid the yearly membership fee for 2016 and 2017, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2016, you will receive no shipment from JLTA and will not be able to use the "My Page" site after April 2018.

●If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to jlta-post@bunken.co.jp

JLTA Secretary General
Rie KOIZUMI (Juntendo University)
JLTA Vice Secretary General
Kazuhiko KATAGIRI (Senshu University)
Yuichiro YOKOUCHI (Hirosaki University)
Makoto FUKAZAWA
(University of the Ryukyus)

JLTA Official Twitter account:

@JLTA_official

https://twitter.com/JLTA_official

<編集後記>

今年の夏から秋にかけて、英語テストに関する書籍が3冊も立て続けに出版されました。すべて本学会員による力作です。まさに実りの秋、といったところでしょうか。しかしこうした書籍で述べられている知見が現場に広く知られるにはまだまだ時間がかかりそうです。『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』が世に出てからすでに四半世紀が過ぎました。どうやってこうした言語テストの知見を広めていくか。学会としても更に考えていかねばならないところです。(KK)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1) 海外学会報告, 2) 書評, 3) 研究ノート, 4) 意見, またその他当学会員の興味関心に沿うもの。



日本言語テスト学会事務局
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1
順天堂大学さくらキャンパス
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001(代表)
FAX: 0476-98-1011(代表)
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp
URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会
委員長 笠原究（北海道教育大学旭川校）
副委員長 宮崎啓（東海大学）

委員
飯村英樹（熊本県立大学）
古賀功（東海大学）
齋藤英敏（茨城大学）
長沼君主（東海大学）